

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

# 平和は「絶対に」求めるべきか?(1) ホッブズを進化心理学で修正する : 自然状態と根本的自然法

著者	内藤 淳
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	71
ページ	13-30
発行年	2015-09-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/11609">http://hdl.handle.net/10114/11609</a>

# 平和は「絶対に」求めるべきか？（1）

—— ホッブズを進化心理学で修正する：

自然状態と根本的自然法 ——

内 藤 淳

## 1. はじめに —— 本稿の趣旨

「平和を守る（求める）べし」は、現代において最も広く支持されている規範だろう。これを理念とする国連憲章は、加盟国に「武力による威嚇又は武力の行使」を慎み、紛争が生じたときも「平和的手段による解決を求める」義務を課しているが、地域や文化圏を超えてそこに193もの国が加わっている事実は、「平和の追求」がいかに広く支持される考えかをよく表している<sup>(1)</sup>。日本ももちろんそれに加盟しているし、「平和主義」は日本の憲法の基本原則でもある。特に最近の日本では、集団的自衛権行使の問題をはじめとして、現政権の外交・安全保障政策に関する議論が盛んだが、それに賛成する側も反対する側も——「隣国を積極的に侵略して我が国の権益を拡張すべき」などと主張するのではなく——「戦争を防いで平和を守る」という平和主義や平和国家を支持する立場に立って自説を展開するところは共通している<sup>(2)</sup>。

それでは、「戦争をしてはいけない」「平和を求めるべき」という考えは、規範として絶対的な正当性を持つだろうか。時代や文化、社会状況の違いを超えて「正しい」ものだろうか。それともそれは絶対ではなく、特定の社会環境条件の下で妥当する相対的な規範のひとつに過ぎないだろうか。

法思想の歴史を振り返ると、人間社会に普遍的に妥当する自然法が存在を主張する学者や思想家が数多くいる。神の意志や摂理を土台にそれを説明するもの、人間の自然的本性に結びつけるものなど、その内容は論者によってさまざまだが、その中で、より合理的に、「平和を求めるべし」という規範の普遍妥当性を論じた代表的な思想家としてトマス・ホッブズが挙げられる。本稿では、そのホッブズの議論に即しながら、当該規範を正当化する論理を検証し、その絶対性／相対性を考えてみたい。

平和の追求は、ホッブズの思想の中で「第一の根本的自然法」と位置づけられ、他の自然法諸規則が成立する源になると共に、国家や国家法に基づく統治を正当化する基盤になっている。言い換えれば、「平和を求めるべき」ことは、人が社会的に結びつき国家の下で法に従って暮らすことの中心的な根拠とされる。ここからホッブズを「絶対平和論者」と捉える見方もあるほどで<sup>(3)</sup>、この根本的自然法の論証が妥当かどうかは、ホッブズの国家論や法思想の是非を左右する重要な論点になる。本稿の議論は、その意味で、ホッブズの思想の土台に焦点を当て、これを問い直す作業であり、その思想の解釈・理解

に大きな意味を持つと同時に、自然法のような普遍的規範の存在が見出せるか、いかなる方法でそれを示すかという法思想史上の一大課題に、ホッブズを通じて取り組むものになる。

## 2. 本稿の方法 ― 規範の普遍的正当性を示すには？

この問題を考えるにあたっては、そもそも規範の普遍的な正当性をいかに示すのかという「方法」が大きな問題になる。言うまでもなく、この問いはそれ自体が法哲学や倫理学での重要な検討課題であって、これらの分野で提唱される正義に関する理論や立場は、この意味での方法論的主張をしばしば含んでいる。この点でどういう考え方を採るかが、本稿でホッブズに着目する理由を含めて以下の内容に大きく関わってくるので、それについての本稿の立場をあらかじめ簡単に説明しておきたい<sup>(4)</sup>。

一般に、規範の正当化は、なんらかの道徳的価値（命題・原理）を規準にして、当該規範がそれに合致・適合すると示す形で論じられる。しかし、国や地域、文化や時代を異にする人びとの間には、それぞれ異なる ― しばしば相反する ― 価値や価値観があり、それに応じて「何が正しいか」についての考え方も大きく変わる。その中で、特定の価値や価値観に依拠して規範の正当性を示すのでは、それと異なる価値観を持つ人に対して有効な正当化にならない。価値観の相違を超えて規範を普遍的・根本的に正当化するには、特定の価値に依拠しない非価値論的な根拠づけが必要になる。

上でも触れた現代正義論における個々の立場は、この点を踏まえつつ「規範の正当化」を論じる各種の試みと言えるわけだが、そこで有効だと筆者が考えるのが、「人間に関する普遍的事実」の分析に基づいて「事実論」により規範を正当化する方法で、その元になるのがホッブズの思想である。ホッブズは、無規範的な自然状態から自然法を導出するに際して、人間の（普遍的な）目的である「自己保存」を達成するために必要な手段として ― 「自己保存」を達成するためには自然状態にとどまっていたはだめで、自然的自由の放棄や主権者の設立が必要「である」からそれをす「べき」だという論理で ― 規範を引き出すという手法を採っている。「“である”から“べし”は導出できない」とよく言われるが必ずしもそんなことはなく、行為主体が目指す対象（目的・志向）やそれを取り巻く状況が事実前提として確定できるなら、「当該状況下で当該目的・志向などを主体が達成するには××が必要・有用である」という事実判断を通じて「××すべし」を合理的に導き出すことができる<sup>(5)</sup>。そこで ― ホッブズが行うように ― 事実前提の中で「すべての人間に共通して当てはまる志向の対象」を確定できれば、そして、それを達成するために必要な手段である「△△」を特定できて、且つそれがどの人にも当てはまることを示せれば、当該「△△」を、誰にとっても妥当する「すべき」こととして合理的に根拠づけることができる。かかる「合理的根拠づけ」により規範の普遍的な正当性を示すというのがここでの方法論の基本になる<sup>(6)</sup>。

もっとも、ホッブズの議論は、事実前提となる人間理解にいくつか問題（事実として妥当でない点や反証可能な点）があり、その部分の見直しが必要である。これに関しては、進化心理学をはじめとする近年の人間科学の諸研究から有用な知見が実証的に出されているので、それを踏まえた修正が可能だと

筆者は考えている。具体的な検討は別稿に譲り<sup>(7)</sup>、その概略のみを示せば、「自己保存」を「目的」とするというホッブズの人間理解は、そこで「人間は（すべからく）生存・繁殖を指向して活動する」という内容に修正される。「自己保存」は、個体としての自分自身の保存すなわち「生存」を指すが、「生存・繁殖」は、自己のみならず自分の子どもをはじめとする血縁者の保存すなわち「自分の遺伝子の保存」を意味する。また、「目的」とは、程度・強度の差はあれ自身がそれを意識的・意図的に志向する対象を言うのに対し、「指向」は、自身の意識的思考の他に無意識的な領域を含めた内面・身体システム全体がそれに向けて作動する対象を指す<sup>(8)</sup>。このように修正された人間理解が事実として「真」だというのが筆者の考えで、この前提に基づくと、規範命題（〇〇すべし）は、

- ① その内容（〇〇すること）が、各人の「生存・繁殖」を達成する上で必要（な手段）である。
- ② それが誰にとっても当てはまる（各人の生存・繁殖手段上の「利益」の一致点である）。

という２つの事実判断を通じて正当化できる。これが本稿で採る方法論の内容であり、これら①②の内容を満たすとき——それに「イエス」と答えられることにより——当該規範命題は、人生観や道徳観としていかなる価値観を持つ人に対しても「すべき」ものとして合理的に根拠づけられ<sup>(9)</sup>、誰に対しても妥当する普遍的な正当性が認められる<sup>(10)</sup>。

前述のように、この方法は、ホッブズの思想を下敷きにしたもので、（前提部分に修正はあるものの）ホッブズが「平和を求めよ」以下の自然法を導出するのも、これと共通の論理によってである<sup>(11)</sup>。すなわち、ホッブズは、「万人闘争」である自然状態を脱して「平和をもとめる」のが、各人の「自己保存」の達成に必要で（前記①）、且つそれはどの人にも当てはまる（前記②）という判断から、「根本的自然法」としての「平和をもとめよ」を引き出している。これをホッブズは「right reason（真なる推論、正しい理）」と言うわけだが<sup>(12)</sup>、果たしてその判断は本当に「right（真）」なのか。そこに問題はないのか。ホッブズが前提とした人間理解が進化心理学などを通じて修正されることは前述の通りだが、国家成立以前の原始・未開の人間の自然状態やそこでの闘争・戦争に関しても、最近では、進化心理学の視点を踏まえた新しい研究がいろいろ出されている。そうした研究成果も踏まえながら、ホッブズの「推論」「理」が妥当かどうかを再検討するのが、以下本稿での具体的な作業になる。これによって、(a) 規範の正当化として、上で筆者が提示した方法が具体的にどのように展開されるか、その特徴や意義は何かを示しつつ、(b) 「自然法の導出」をめぐるホッブズの議論に対して、従来とは異なる角度から意義や問題点を浮かび上がらせる、(c) 「自然法」のような普遍的規範が成立するか否かについて一定の示唆を引き出す、のがここでのねらいである。

### 3. 自然状態について

検討をはじめめるにあたって、まず、議論の起点である人間の自然状態について、ホッブズの想定が妥

当かどうかを確認しておく必要がある。それが誤ってはい、後に続く「理」全体の基礎が失われることになるし、そこでの想定根拠や要因は、以降の「推論」にも少なからず影響すると見込まれるので、この点の検討は本稿全体にとって重要な意味を持つ。

とはいえ、ここには、そもそも何をもって人間の自然状態と見るか、どういう方法でその中身を確定するかといった根本的な問題を含めて、さまざまな論点がある。その中で、自然状態に関して「闘争」である／「平和」である、その他何らかの結論を出すには、哲学のみならず歴史学、人類学、考古学、生物学などを含めた多様な角度からの包括的・総合的な検討が必要で、かかる作業をここで試みるのは、紙幅的にも筆者の能力的にも困難である。しかしながら、最近、これに類する試みとして、進化心理学の視点を採り入れながら、国家社会と非国家社会の比較や先史時代の戦争状況などを考察した研究が出されているので、以下ではそれらを参照しながら非国家的な自然状態について——最終的な結論は出せないとしても——一定の考察を行い、「根本的自然法」の検討に資する示唆を引き出すことを試みたい。

### (1) 万人闘争の要因

広く知られているように、人間の自然状態は「万人闘争」になるというのがホブズの見方だが、なぜそうなるのか、その説明を振り返っておこう。各々の人間は、「自身の保存 (their own conservation)」を「目的」としつつ、それを達成するための心身の諸能力において平等である。もちろんひとりひとりの知力や腕力に差はあるが、弱い者でも共謀すれば強い者を殺せるし、経験と共に誰もが知力を高められる。そこでは「自己保存」の達成に向けて誰もが等しく希望を持ち、何であれそれに必要なことを各自が判断して自由に行うので、衣食住その他の資源の獲得やその際の妨害排除をめぐる「かれらはたがいに敵となり、たがいに相手をほろぼすか屈服させるかしようと努力する」。そこで生じるのは次のような事態である。

ある人が植えつけ、種子をまき、快適な住居を建築または占有すると、他の人びとが合同した力をもってやってきて、かれを追いだし、かれの労働の果実だけでなく、かれの生命または自由をも、うばいとることが、おそらく予想されるだろう。そして、その侵入者は、さらに別に侵入者による、同様な危険にさらされる<sup>(13)</sup>。

その中で安全を確保して自己を保存するには、「先手」をうって他人を征服・支配するのが「妥当な方法」である。すなわち「自分をおびやかすほどのおおきな力を、ほかにみないように」力や計略をもって他の人を支配するのがよい。それに伴い、人は他者からの軽視や過小評価に敏感になり、相手に害を加えてでも大きな評価を強奪しようとするから、第一に「利得をもとめて (for Gain)」, 第二に「安全をもとめて (for Safety)」, 第三に「評判をもとめて (for Reputation)」人びとは互いに暴力を用いて争い合う。こうして、人間の自然状態は「各人の各人に対する戦争 (Warre of every one against every one)」になる<sup>(14)</sup>。

ここではなににとも不正ではありえず、正邪（Right and Wrong）、正不正（Justice and Injustice）の観念は存在の余地を持たない。自分のものと他人のものとを区別する所有の観念もなく、「各人が獲得しうるものだけが、しかもかれがそれを保持しうるかぎり、かれのものなのである」。「力の強さ（Force）」と「欺瞞（Fraud）」が徳性にさえなりうるこうした状況で、人びとが直面するのは「継続的な恐怖と暴力による死の危険」であり、それゆえ「人間の生活は、孤独でまずしく、つらく残忍でみじかい」<sup>(15)</sup>。

## （２） ナーヴソンの疑問

ホッブズのこうした見方に対してはさまざまな批判がある。とりわけ根本的なのが、その人間理解への批判だろう。ホッブズの議論では、人間が自己保存に向けて一貫して利己的に行動すると解されて話が進むが、他方で、人間は、他者を思いやりたり人のために尽くしたりといった利他的な性質をも備えているのであって、ホッブズの理解は一面的で不十分だというものである<sup>(16)</sup>。しかしながら、こうした批判は、人間の指向を「生存・繁殖」に見出す前述（２後半参照）の修正によって克服され、人間の行動原理は「利己性」に集約して理解できるというのが本稿の立場なので<sup>(17)</sup>、この種の批判は以下では問題にしない。他方、それと違って、人間への利己的な理解を共有した上でホッブズの自然状態論に疑問を呈するものとして、カナダの政治哲学者であるジャン・ナーヴソンによる批判を挙げておく。

ナーヴソン曰く、ホッブズの見方では、人間の社会生活に関係する２つの重要な要素が見落とされている。その第一は、各人の持つ「他者観察とそれによる行動調整」能力である。生きていく中でわれわれは互いに他者の行動を観察し、接する相手を選んで行動することができる。「人を殴ってでも欲しい物を手に入れる」ような人のことは回避し、そうでない協調的な人を選んで付き合う。第二に、周囲の人とのわれわれのつきあいは通常「１回限り」ではなく継続性・反復性を持つ。その中では、相手が自分のために何かをしてくれたり、自分が相手のために何かしたりすることでお互いが利益を得られる場合が多々あるのであって、目の前の相手をその都度騙したり殺したりしていたらその恩恵を失ってしまう。

だとすると、各人は各人にとって「敵」になるのではなく、それぞれが協調的な相手を見つけて助けて暮らすのではないか。もし周囲に他人の生命や財産を奪おうとする人がいれば、力を合わせてそれを排除しさえするだろう。「多数」となって力を得るのは泥棒や殺人者でなく正直な人たちであって、目の前に現れる人すべてを「敵」として戦うような人たちはそれに負けて淘汰されてしまうにちがいない。従って、非国家的な自然状態であっても、人間の行動には「道徳的」コントロールが相応に働く。ホッブズの考えるような状況にはならない<sup>(18)</sup>。

## （３） 進化学論に基づくホッブズ修正論

上でナーヴソンは、人間の利己性を踏まえながら、人が利益に向けて行動するとしても、むしろそうであるがゆえに自然状態は闘争でなく協調に向かうという見方を示してホッブズを批判するわけだが、この批判が妥当かどうかは、ここでの検討において重要な論点になる。この問題は、進化心理学でもし



ばしば取りあげられるので、典型的な議論として倫理学者の内井惣七と政治哲学者のグラント・ブラウンの見解を見ておこう。

### (i) 内井惣七による進化心理学理論の活用

内井は、進化心理学の基礎理論である「血縁淘汰の理論」と「互恵的利他行動の理論」に基づいて、人間には、利他的に行動する性質が「生得的に」備わると指摘する。人間は近縁度に従って血族と同じ遺伝子を共有するから、近縁者に利他行動をすることは「自分の遺伝子を残す」上でプラスになる。そうした行動性向（を生じさせる遺伝子）を持った個体は、そうでない個体よりも子孫を残す可能性が高いので、世代と共にその性向が広まり、「血族の面倒を見る強い傾向」が遺伝的基盤を持って人間に備わる（血縁淘汰の理論）<sup>(19)</sup>。

他方、血縁がなくとも、同じ個体同士が頻繁に交渉できる環境にあり、且つ各個体が交渉相手の識別と交渉結果の記憶の能力を持つ場合——すなわち人間のような生物種の場合——、決まった相手との間でお互いに利他行動をやり合うことで<sup>(20)</sup>、それをしないとき以上の利益、すなわち「互恵」の利益を双方が得られる。そこで「相手から親切を受けながら自分は相手に親切にしない」といった「タダ乗り戦術」を採ると、そのときには得をしても、以降、相手はその記憶からこちらに利他行動をしてくれなくなるので、「互恵」の利益を得られなくなる。一方、どんな相手に対しても常に利他行動をとってしまふ「お人好し」では、相手は心置きなくこちらを裏切って「タダ乗り」することができて、交渉の度に自分が損をし続ける羽目になる。そのいずれでもなく、自分を裏切ってきた相手には利他行動をしないが、相手が自分を裏切らないかぎりには利他行動をとる「条件つき利他主義」戦略を採ると、（こちらを裏切らない）協調的な相手と協調関係を重ねて「互恵」の利益を得られ、「自分の遺伝子を残す」上で有利になる。そういう個体は、その戦略を採らない個体よりもたくさんの子孫を残せるので、自然淘汰の中で「条件つきの利他的行動」を行う性質が、遺伝的基盤を持って人間に備わる（互恵的利他行動の理論）<sup>(21)</sup>。

こうして人間は、血縁者や協調的な「仲間」に対して利他行動を行う性質を生得的に備えるが、この性質は各個体の中の「道德感情」に反映していると内井は言う。道德感情とは、「単なる好き嫌いを表す感情」とは異なり、「そうすべき／すべきでない」という「義務や責務の感覚」を伴う感情のことで、まさに上記2つの遺伝的効果のゆえに人間に生得的に備わったものである<sup>(22)</sup>。これが働くことによって、われわれの中では、利他的・協調的行為に対して「自分が嫌だということでも、それが義務だと判断するなら好みに逆らって行」うという「強い動機づけ」が生じ、「行為への拘束力」となる<sup>(23)</sup>。こうして「親が子の面倒を見たり、他者との協力的行動で自分の役割をはたして他者の幸福にも貢献したりすることは、『義務』という形で人間に意識され」、「そうしなかった場合には、『自責の念』という形の苦痛が生じる」。各人の内面におけるこうした作用を通じて、「人間の社会性を維持する利他的傾向性は、道德感情を伴って働」き「励行される」<sup>(24)</sup>。

加えて内井は、ゲーム理論に基づく「進化的に安定な戦略」(ESS, Evolutionarily Stable Strategy)

の考察に言及して自説のさらなる裏付けとしているが、この点は、次のブラウンの議論が詳しいのでそちらで扱う<sup>(25)</sup>。上述のような形で、人間には利他的・協調的な性質が生得的に備わっていることを進化心理学理論を通じて内井は指摘し、それゆえ「人間本性と自然状態に関するホップズの想定は相当程度の修正を必要とする」と言う。「進化的な知見が大幅に間違っていなければ、人間本性はホップズが考えたほど自己中心的で攻撃的ではない。道徳感覚や道徳的能力は人間本性の一部としてすでに備わっており、限定された形ではあるが『利他性』の傾向さえ生得的に存在するとみなしてよい」からで、ここから内井が示す自然状態に関する「基本的事実」は次のようになる。

- (a) 人間には自己中心的な傾向とともに、血縁者に対する利他的傾向性および非血縁者に対しても（おそらく条件つきで）相互的利他行為を行なう傾向性と、強制力のある人為的制度なくしても自発的に協調的な活動を行なう傾向性がある。これらの利他的傾向性（その背後にはおそらく遺伝子の強力な「利己的」傾向性があるにせよ）は、強力な特有の道徳感情によって裏打ちされて実際に行為をもたらしうる（行為への拘束力を持つ）。
- (b) 人間は自然状態においても集団を形成し、社会生活を営む。そして前述の傾向性に従って社会生活を支える規範（これはその集団の置かれた特殊な条件等によって細目が変わるかもしれないが、一般的な内容は人間の生物学的な特性によって相当程度まで規定される）を形成し、それをおおむね遵守しようとする<sup>(26)</sup>。

(ii) グラント・ブラウンによるゲーム理論的分析

他方、ブラウンは、（内井も言及している）「囚人のジレンマ」ゲームの分析とそれに基づく ESS の概念を通じて、人びとの間での「協調行動の進化」を示そうとする<sup>(27)</sup>。広く知られているように、「囚人のジレンマ」ゲームとは、例えば下の表のような得点配分の下で 2 人のプレイヤーが「協調」か「裏切り」かを選択する対戦を繰り返し、得点を競うコンピュータ・シミュレーションのゲームである。

表 1 「囚人のジレンマ」ゲームでの得点表<sup>(28)</sup>

		横プレイヤー	
		協 調	裏 切 り
縦プレイヤー	協 調	縦プレイヤー：3 点 横プレイヤー：3 点	縦プレイヤー：0 点 横プレイヤー：5 点
	裏 切 り	縦プレイヤー：5 点 横プレイヤー：0 点	縦プレイヤー：1 点 横プレイヤー：1 点

表から分かるように、このゲームを「1 回限り」行う場合は、いずれのプレイヤーにとっても「裏切り」を選択するのが合理的で得である。（相手が「協調」してくるなら、自分は「協調」して 3 点をとるより「裏切り」って 5 点との方がよい。相手が「裏切り」なら自分が「協調」すると 0 点だが、「裏切り」



れば1点を確保できる。)しかし、この対戦を複数のプレイヤー間で長期にわたって繰り返す「繰り返し囚人のジレンマ」ゲームを想定すると話が変わってきて、その結果は、むしろ道徳行動(協調性)の進化を示すモデルとなる。各プレイヤーが「1回限り」ゲームの成果を踏まえて毎回相手を「裏切る」なら、お互いに対戦の度に裏切り合って得点1を繰り返すことになる。これに対して、必ずしも相手を裏切らず「協調」を採り入れるプレイヤー、特に「一定の条件つきで協調戦略をとるプレイヤー」は<sup>(29)</sup>、「裏切り」者相手だと初回に「タダ乗り」されて損をするが、2回目からはこちらも「裏切る」のでそれ以上に「裏切り」者との得点差は開かない。他方で、自分と同類の相手と対戦したとき(そしてそれが繰り返されるとき)には相互「協調」によって得点3を重ねられるので、「繰り返し」が続くほど「裏切り」者よりも優位になる。ここから、ブラウンは、常に「裏切り」行動をとるプレイヤー(always-defect, 以下, AD)と「条件つきで協調戦略」をとるプレイヤー(以下, TFT)とに関して、

- (ア) ADの集団の中に、TFTが入って任意の相手と対戦を繰り返すと、最初はADがTFTを食い物にして高い点を得る。が、2回目以降の対戦ではそうならず、その中でTFTが生き残って次の世代に複数の子孫を残せれば、TFT同士の対戦機会が増え、両者が「協調」し合って得点を稼いでいくことで子孫を残す可能性が高まり、世代と共にTFTが数を増やしていく。つまり、ADの集団にTFTは「侵入可能」である(ADはESSにならない)

と言ってTFTの利点を挙げた上で、コンピュータ・シミュレーションではなく、現実世界での人間同士の交渉を想定したとき、この傾向は一層高まると言う。理由は次の2つである。

- (イ) 人間の場合、交渉相手が偶然や無作為で定まるのではなく、それを自分で選択できる。われわれは、最初の交渉で自分を裏切った相手を以降はなるべく避け、自分に協力的な相手を積極的に選んで付き合いを続けることができるので、(無作為対戦の場合以上に)「協調」による得点蓄積機会を増やすことができる。
- (ウ) しかも現実世界では、ある人の過去の行動実績が、直接・間接にそれを見聞した人を通じて「評判」になるので、それを基に、各人は、(他者と「協調」しない傾向を持つ)「悪い評判」の人を回避して、「よい評判」のある協調的な人を選んで付き合い、相互協調による利得をより確実に得ることができる<sup>(30)</sup>。

こうして、人間の世界では、組織的・制度的な誘導や強制がなくとも、他人と協調せず「裏切り」傾向を持つ人に対して「相手が裏切らない限り協調する」人が自然に有利になって生き延び、世代と共に数を増やしていく。すなわち(条件つきではあるが)協調的な行動性向が人間に発達していく。もっとも、現実には、すべての人がそのように合理的に行動するわけではなく、一時的な誘惑や目先の損得、情報の不足やあいまいさなどから、非協調的な「タダ乗り」行動をとる人が出てくるし、そのために盗

みや暴力も発生する。「(道徳的逸脱) 個体が一部で生き残る「生態学的ニッチ」が現実には生じる<sup>(31)</sup>」が、理論的・基本的には「条件つき協調」行動を採ることが人間にとって「得」、そこから逸脱するのは「損」であって——すなわち「条件つき協調戦略」は人間にとっての ESS である<sup>(32)</sup>——かかる行動性向が人間に進化する。この戦略が基礎になり、それが個別の集団の状況等に応じて発展したのが道徳だというのがブラウンの主張で、利得に向けて行動する人間は、その利ゆえに協調的な行動性向を自然に身に付け、協調的な社会を作って生きていくことになる。

#### (4) 集団の内と外

このように、内井やブラウンの考察では、協調性や利他性が人間に自然に備わるとされ、ホッブズの「闘争」的な自然状態論への疑問と修正が提示される。とりわけブラウンの考察は、人間の「他者観察能力」と「交渉の継続性・反復性」を強調していた先のナーヴソンの主張とぴったり一致するもので、ホッブズに対するナーヴソンの批判を裏づけ補完する内容になっている。

しかしながら、これでもってホッブズの自然状態論を否定するのは若干早計で、ここでの議論にはもう少し慎重な考察が加えられる必要がある。「血縁」や「互惠」の効果から、生物として本来「利己的」な人間に利他的・協調的な性質が進化するのには内井やブラウンの示す通りだし、それを裏づける研究は、進化心理学の領域でその後もいくつも出されている<sup>(33)</sup>。原始の人類が、単独ではなく、血縁を軸にした親族・部族単位で社会集団を作り、その中で相応に協調して暮らしていたと考えられることもそれを裏づける。だが、ではその「外」にいる他の部族やその構成員に対してはどうか。

この場合、相手との間に——族長同士の政略婚などによる例外もあるだろうが——基本的に血縁関係はないし、現代と違って交通や通信が未発達な中で互いの交渉の機会もずっと限られる。一定以上離れた地域に住む部族のメンバーの間では、一生を通じてまったくつき合いがないか、一度か二度接点を持っても次にいつ会うか分からないという場合が多いだろう。もちろん、そういう中でも部族間の交易・交流は見られたし、そこでの「繰り返し交渉」を通じて協調関係を保った部族もあっただろうが、そうでない、互いに没交渉な部族もたくさんあったにちがいない。そこでメンバー間に「出会い」があるときも——狩りで遠出した先でばったり遭ったとか、山道で迷った末に他の部族がいる場所に出たとか——偶然的な要素が大きいと思われ、「その人」を自分が選んで出会うわけではないし、その相手についての「評判」も入手しにくい。するとこの場合、内井やブラウンの議論で協調行動が浸透する前提に据えられている「血縁」と「繰り返し交渉」という条件が当てはまらないし、協調を促進する要素としてブラウンが挙げる(イ)と(ウ)の条件も働かない。

先に述べたように、「囚人のジレンマ」ゲームは、「1 回限り」であるなら「裏切り」を選択するのがプレーヤーにとって合理的である(表 1 とその後の説明参照)<sup>(34)</sup>。その相手がこれまで誰に対しても一貫して「協調行動をとっていた」といったデータがあるならともかく、そうでないなら裏切られて損をするのを避けてこちらから「裏切る」のが安全策である。「よその部族の知らない男」が狩りで疲弊した様子で獲物を運んでいる場面に出くわしたなら、運ぶのを手伝ってあげてもお礼に分け前をもらえる

保証はないし、手伝った末に相手部族の領内で捕まって奴隷にされるかもしれない。手伝いなぞせず、隙をみて——その方が早ければ彼を殴るか殺すかして——獲物を奪ってしまう方が、より確実に利得を見込める。

そう考えると、「繰り返し交渉」の中で協調行動が浸透することを示す内井らの考察は、裏を返せば「繰り返し交渉」の成立しにくい他部族・他集団との間では協調行動がなされにくく、むしろ暴力を含めた「裏切り」行動が生じやすいことを示唆するものでもある<sup>(35)</sup>。人間は確かに、自然のままでも自分に「近い人」との間で協調的な社会集団を形成するだろうが、その一方で、「遠い人」との間では協調より争いが起きやすいという推論がここから引き出される。ホッブズの表現に即して言えば、人間の自然状態は「万人闘争」にはならなくても「万族闘争」に成り得るということで、だとすると「闘争」要素を前提に規範の考察・導出を行ったホッブズの想定は——進化理論の観点を踏まえても——決して否定されず、むしろ集団同士の関係を視野に入れて人間の実態を捉えた有効な構想として評価できる。

#### 4. 非国家社会の戦い

上の推論の妥当性を調べるために、次に、原始古代の人類に関する研究に目を向けてみたい。国家や政府が未発達だったその時代に、実際に人類がどういう暮らしをしていたか、平和に暮らしていたか戦いに明け暮れていたかが分かれば、ここでの考察の重要な裏付けになる。

とはいえ、これについても専門家の間で様々な見方がある。ホッブズとは対照的に、ルソーが自然状態として「素朴で憐れみ深い人たちの平和な暮らし」を想定したことはよく知られているが<sup>(36)</sup>、20世紀に非西洋社会の調査が進んだ人類学では、文明化以前の人間社会を「ルソー的」に捉える見方とそれへの批判が大きな議論的になった<sup>(37)</sup>。

歴史学や考古学でも、人類は誕生と共に戦いを繰り返してきたという「宿命派」の見方と、戦争は歴史がある程度進んでから生じたとする「後天派」の見方とがあるようだが<sup>(38)</sup>、その中で、多くの研究者は、新石器時代に農耕が始まって以降は世界各地で幅広く戦争が起こっていることを認める。それ以前の旧石器時代、狩猟採集社会がどうであったかには意見の相違があり、例えば日本についても、戦争は弥生時代に農耕や定住が始まって起こったという見方と、縄文時代にも戦いがあったという見方がある<sup>(39)</sup>。ここには考古学的・人類学的な証拠や調査結果をどう解釈するかという問題が絡んできて、戦争がいつ始まったかを判定するのは筆者の手に余る<sup>(40)</sup>。ただその一方で、これら考古学や人類学での具体的な研究成果を踏まえながら、特に「国家社会」と比較して「非国家社会」で戦いや暴力がどういう形で、どのぐらいの頻度で見られるかをまとめた研究が、スティーン・ピンカーとアザー・ガットによってなされているので、ここではそれを参照してみたい<sup>(41)</sup>。

##### (1) 「襲撃」としての戦い

ピンカーとガットはいずれも、オーストラリアのアボリジニや南米のヤノマミ族など、人類学におけ

る狩猟採集民の調査や報告を参照し、彼らがかなり頻繁に、且つ——敵を皆殺しにしたり、死体を切断したりその皮を剥いだりして——凄惨に戦いをしている様子を具体的に示している。その際に２人がそろって強調するのは、その主要な形態が「襲撃（raids）」だということである。「戦い」というと、われわれは川中島や関ヶ原のように両軍が相対峙してぶつかり合う「battle」を想定しがちだが、「未開の戦争」においてそれは必ずしも一般的ではなく、なされる場合もしばしば示威的・儀礼的だったという。戦いの場所や時間は事前に決められ、双方の武装した戦士が一定の距離をとりつつ言葉を浴びせ合い、武器を誇示したり槍を投げ合ったり、あるいは交互に素手で相手を殴り合ったりする。状況がエスカレートして実際の戦いが起こることがあってもそれは例外的で、戦死者が出ることも少なかった<sup>(42)</sup>。そうではなくて「最も決定的で一般的な戦争の形態」は、次のような形でなされる奇襲攻撃であった。

夜明け前に男たちの一団が敵対する集落に忍び込み、小便のために小屋から出てきた最初の男に火矢を射る。何ごとかと飛び出してくる他の男たちにも次々に矢を放ち、壁に槍を突き刺して入口や煙突に矢をかけ、小屋を燃やしていく。寝ぼけ眼で防御態勢をとれない村人たちの多くを殺し、襲撃者たちは森の中に消え去る。襲われた村の住民は最後の一人まで殺されるか、もしくは男が皆殺しにされて女たちはさらっていかれる<sup>(43)</sup>。

この戦い方は、オーストラリアのアボリジニでも、アメリカ・インディアンでもアラスカ・エスキモーでも、南米ヤノマミ族でも、さらにはニューギニアの農耕部族でも基本的に共通で、ピンカーとガットが挙げる戦いの例はいずれもこの形でなされたものである<sup>(44)</sup>。

## （２）非国家社会と国家社会の戦いの比較

こうした戦いは、彼らの間でどの程度頻繁に起こっていたのだろうか。戦史や戦記があるわけではないので正確なところは分からないが、そこでの「暴力による死者の率」を見ることでその頻度を推測することができる。文明社会と比べて彼らの社会は人口がずっと少ないから、絶対数で見れば死者も少ないが、死者全体のうちどの程度が「暴力による」ものかの「率」を見れば、彼らの社会において「戦い」がどれほど頻繁で危険だったか、人びとの日常を脅かすものであったかを知る目安になる。さまざまな地域について人類学者が推計した数字をガットも引用しているが、より整理したまとめがピンカーに見られるので、そちらを参照したい（ピンカーもガットを参照している）<sup>(45)</sup>。

ピンカーは、民族誌的な人口統計や考古学での遺跡調査などに基づく数々の研究から、「先史時代の遺跡 21 ヶ所」、「近現代の 8 つの狩猟採集民社会」、「狩猟採集耕作民（狩猟・採集とあわせて原始農耕を行う）社会 10」、「国家社会」のそれぞれについて、当該社会での死者全体に占める「戦いによる死者の割合」をまとめている<sup>(46)</sup>。ピンカーは、個々の遺跡・社会ごとに具体的な数値をグラフにしているが、紙幅の都合もあるので、その概要のみを表にまとめ直すと以下ようになる。

この表から明らかなように、国家社会における数値が高くて 5%、20 世紀以降ではせいぜい 3%で

表2 非国家社会と国家社会における（死者全体に占める）戦いによる死者の割合

	平均値	当該カテゴリーで最大値を示す社会	国家社会各々における推計値
1. 先史時代の遺跡（21カ所） * アジア、アフリカ、ヨーロッパ、南北アメリカでの狩猟採集民・狩猟採集耕作民の遺跡、紀元前1万4000年～西暦1770年まで	15%	60% （サウスダコタ州のクロウ・クリーク）	
2. 狩猟採集民（8社会）	14%	30% （パラグアイのアチェ族）	
3. 狩猟採集耕作民（10社会）	24.5%	60% （アマゾンのワオラニ族）	
4. 国家社会 古代メキシコ 17世紀ヨーロッパ 1900-1960年のヨーロッパ 20世紀の世界全体（wars & genocides） 20世紀の世界全体（battle death）* 2005年のアメリカ合衆国 2005年の世界全体**			5% 2% 3% 3% 0.7% 0.04% 0.03%

\* battle death は、戦闘によって死んだ軍人と民間人を合わせたもの。

\*\* 戦争、テロ、ジェノサイド、その他軍人による殺害を合わせたもの。

あるのに対して、非国家社会（表中の1～3）では、各カテゴリーの平均値で14～24.5%と著しく高い数字になっており、いかにそこで戦いとそれによる死が頻繁だったかがうかがえる。中でも、最大値の欄にあるように、クロウクリークやワオラニ族で（少なく見積もって）部族の60%が戦いで死んでいるというのは驚くべき数値で、まるで部族全体が戦闘部隊であったかのような印象を与える<sup>(47)</sup>。この他にも、先史時代の遺跡ではヌビアの117番遺跡（紀元前1万2000年～1万年）が45%、インドのサライ・ナハール・ライ（紀元前2140年～850年）で30%とかなり高い数値で、狩猟採集耕作民社会のアマゾンのヒバロ族、ニューギニアのゲブシ族でも30%を超える割合が示されている。

さらにピンカーは、狩猟採集社会と狩猟原始農耕社会を合わせた27の非国家社会と9の国家社会について、人口10万人あたりの年間での「戦いによる死者の割合」をまとめている<sup>(48)</sup>。これも上と同様に概略をまとめなおすと表3のようになる。

ここでの国家社会のうち、19世紀のフランスは革命やナポレオン戦争、普仏戦争があり、20世紀のドイツ、日本、ロシアなども2つの大戦で多くの被害を出している。それらと比較しても、非国家社会の平均値は著しく高い。中で最も高いのは、1840年代のカリフォルニア州のカトー族で1,500近い数になっており、ニューギニアのグランド・バレー・ダニ族や北米平原のピーガン族の数値も1,000である。1,000ということは、自分の周りに親族や隣人・友人などが100人いるとして毎年その中の1人が「戦死」する計算となり、日常生活が「常在戦場」化しているといっても過言ではない。

先にも述べたように、文字記録のない社会での統計数字の確定には困難がつきまとい、上のデータも

**表 3** 非国家社会と国家社会における（人口 10 万人当たりの）  
戦いによる死者の年間での数

	死者数
非国家社会 27 の平均	524
国家社会	
19 世紀フランス	70
20 世紀ドイツ	144
20 世紀日本	27
20 世紀ロシア	135
20 世紀アメリカ合衆国	3.7
20 世紀世界全体での組織的暴力による死 （戦争，ジェノサイド，粛清，人為的要因による飢餓 など）	60

あくまでそうした限界の下で示されるものにすぎない。が、おそらくは少なく見積もられているであろう非国家社会の推計でも（注(45)参照），国家社会に比べてこれだけ大きな数字が出ることから，われわれの生活に比べてそこでは戦いやそれによる死がはるかに日常的だったとの推測が十分に成り立つ。

（以下次号）

#### 注

- （1） 国際連合憲章第 1 条，2 条，33 条。加盟国数は 2015 年 3 月時。
- （2） 例えば，2014 年 4 月 3 日の朝日新聞社説では，安倍政権の「防衛装備移転三原則」や積極的平和主義が平和主義を転換するものと批判されている。他方，同年 8 月 15 日の読売新聞社説では，「戦争の可能性を極小化し平和を維持するために」平和国家として，積極的平和主義に基づく集団的自衛権行使，日米同盟強化を図るべきだとの主張がされている。
- （3） 田中 [2012] 117 頁。
- （4） 詳しくは内藤 [2015a]。同 [2013a]，同 [2007] 第 2 章・第 4 章も参照。
- （5） 内井 [1996] 172-175 頁にてこの点が指摘・強調されている。内藤 [2007] 第 4 章，同 [2013a] 115-120 頁も参照。
- （6） 言うまでもないが，ホッブズ思想についてはさまざまな解釈（と解釈史）がある。本文で述べたような「価値独立」「価値中立」的理解とは異なるホッブズ理解も当然あり，その中のいずれが妥当な解釈かは哲学的に重要な課題だが，そこに踏み込むのは本稿の意図から外れる。かかる価値独立的なホッブズ理解に立った場合に，本文で述べた「規範の根本的正当化」方法が浮かび上がってくるので，その方法に拠ると（ホッブズが根本的自然法と位置づけた）「平和追求」の普遍妥当性が本当に論証されるのか，それを検討する中で普遍的規範の考察に際して目を向けるべき新しい視点や論点が見出せるかなどを考えるのが，ここでの意図であり以下の議論の内容になる。なお，ホッブズ解釈・理解の歴史的展開については，タック [1995] 第 3 部などを参照。
- （7） 注(4)の文献参照。
- （8） 「目的」から「指向」への修正は，ここでの規範正当化論において，「指向」内容の（価値的・道徳的）正当性を問う余地をなくし——当該「指向」は人間に普遍的であって，それを価値的に非と評価してもそれ以外の形で人間が「ある」ことが不可能だから——，この部分での価値的論証を不要にするという重要な意義を含んでいる。その説明は，内藤 [2013a] 117-119 頁，同 [2015a]。



- (9) 本人が意識の上でどう思っているように、各人の心と身体のはたらきは「生存・繁殖」に向けて活動しており、自身のその指向を達成するためには「〇〇する」ことが必要であって、それはあなたにも彼にも彼女にも当てはまる。あなた自身の指向しているものの達成に必要なのだから、あなた（や彼や彼女）は「〇〇すべき」で、この「べし」はあなた（や彼や彼女）に対して正当に根拠づけられるというのがここでの論理である。これに対しては、「なぜ私がその指向通りにしなければならないのか。私は別に生存・繁殖などしたいと思っていないから、それに向けて〇〇すべきと言われても納得がいけないしそれが正当だとも思えない」という反論があるかもしれないが、その主張に関わらずその人も「生存・繁殖」に向けて日々動いているのだから、そのために必要なことを「すべき」という指令は、当該「生存・繁殖」行動主体（すなわちその人）に当てはまる。
- (10) このことは、本稿の方法とは別に、非普遍的で主観的な規範正当化論として、何らかの価値観に依拠する方法が成り立たないという主張を含まない。それはそれで規範正当化方法のひとつだが、「価値観や人生観の相違を超えて妥当する正当化」にはならず、その意味での「規範の根本的正当化」としては本文で示した方法が有効だというのが本稿の立場である。内藤 [2015a] 注24。
- (11) 前述の「自己保存」と「生存・繁殖」の違いなどは、本稿の議論の範囲ではあまり問題にならない。ここで扱う「規範正当化の道筋」としては、ホッブズの使う「自己保存」と「生存・繁殖」を区別しなくても差し支えはない。
- (12) Hobbes [1998] p. 33. 訳語は邦訳 50-51 頁より。
- (13) 以上の引用は、Hobbes [1968] p. 184 (邦訳 (一) 208-209 頁) より。
- (14) Hobbes [1968] pp. 184-185 (邦訳 (一) 209-210 頁)。
- (15) Hobbes [1968] p. 188, p. 186 (邦訳 (一) 211 頁, 213-214 頁, 但し訳語は一部変えている)。
- (16) これに関するシャフツベリとバトラーによるホッブズ批判の意義や問題点は、若松 [1978] にて整理されている。
- (17) 進化心理学における血縁淘汰の理論、互惠的利他行動の理論、間接互惠の理論などから、人が行う利他行動は、自分の生存・繁殖（遺伝子の保存・複製）を有利にする、遺伝子レベルでの「利己的」行動（括弧付きで表す）と捉えられる。内藤 [2015a]。詳しくは、内藤 [2007] 第3章、同 [2009]。
- (18) Narveson [2008] pp. 34-36.
- (19) 内井 [1996] 132-139 頁。
- (20) ここでの利他行動とは、正確に言うと「自分が一定の負担を負いながらもその負担分以上の利益を相手にもたらす行動」を指す。
- (21) 内井 [1996] 139-146 頁。
- (22) 進化理論に基づいて「道徳感情の生得性」を強く主張したのはマイケル・ルースで (Ruse [1998])、内井のここでの主張もルースの見解が下敷きになっている。但し筆者は、ここに内井（やルース）の主張の問題点があると考えているので、ここでの「道徳感情論」には賛成しない。血縁淘汰や互惠的利他行動に基づいて進化の中で人間に備わったのは、血縁者や仲間に利他行動をしたい、しようという好みや意欲を喚起させる感情であって、「義務や責務を伴う感覚」は生得的でない（個々人が後天的に発達させるもの）かもしれないからである。それを「生得的」だと言うなら相応の実証的根拠が必要だが、この点では当のルースも証拠が不十分だ（「この主張は証拠の先を行くもの」）と認めている。Ruse [1998] pp. 234-235.
- (23) 内井 [1996] 186-187 頁, 189 頁。
- (24) 内井 [1996] 178 頁。
- (25) 後でブラウンが言うような「繰り返し」の「長期ゲーム」において、決して相手に協力しない「利己主義」と、常に相手に協力する「利他主義」、条件つきで相手に協力する「条件つき利他主義」の中のどの戦略が生き残っていくかを考えると、「条件つき利他主義」をとる多数の個体が少数の「利己主義」個体と共存するか、もしくは各個体が一定の割合で「条件つき利他主義」と「利己主義」を使い分けて行動するという形に落ち着くと推測される。すなわち、自己利益を最大化したいと望む個体の間では、相手と協力しないのではなく、相手と相応に協調する——内井の表現では「概して『道徳的』である」——戦略が広まっていくと考えられる。従って「人類の社会的行動は『道徳』と『利己主義』の『多型』で安定しているか、あるいは二つの『混合戦

- 略』で ESS になっているかのいずれかである」というのが内井の見方である。内井 [1996] 146-153 頁, 213-214 頁。引用は同書 214 頁より。
- (26) 内井 [1996] 161-162 頁。
- (27) Brown [2007]。この論文は、先に挙げたナーヴソンの理論を検証する論文集中に収録されており、ナーヴソンもその内容を支持するコメントを出している。Narveson [2007] p. 237.
- (28) アクセルロッド [1998] 8 頁より。
- (29) 「しっぺ返し (tit-for-tat)」戦略がその典型で、相手との最初の交渉では「協調」し、その後は、前回相手が自分にしたのと同じ行動をとる。相手が裏切ってくれば次回こちらも「裏切り」、相手が修正して「協調」行動をとればこちらも次回に「協調」する。内井が言う「条件つき利他主義」に相当する。
- (30) Brown [2007] pp. 180-182.
- (31) Brown [2007] pp. 192-193.
- (32) 先に触れたように（注(25)）、この点で内井は「道徳が ESS である」とは言っておらず、ブラウンの主張との間に微妙な違いがあるが、本稿の議論ではこの違いは問題にならない。
- (33) 最近の研究の紹介は、小田 [2011]、五百部・小田 [2013] など。
- (34) アクセルロッド [1998] 7-10 頁など。「つきあう相手と再びあいまみえるかもしれないということが、協調が生まれる可能性を引き出す」（同書 11 頁）。
- (35) これに対して、内井の立場からは「道徳感情」の存在に基づく反論が出されうる。すなわち、仲間との「繰り返し交渉」に基づく進化の中で、人間は他者に対して「利他的に行動すべき」と感じる「道徳感情」を備えたのだから、そうなった以上は、同部族に限らず他部族の人に対してもそれが向けられて、相手を殴ったり殺したりは「すべき」でなくて、獲物を運ぶのを手伝ってあげる「べき」（そうしなかったらあとで自責の念が発生する）という意識が発生して協調行動が生じるのだと。しかし、先述（注(22)参照）のように、道徳感情が生得的か否かは証拠不足の「未解決の問題」であって、この反論が成り立つかどうかは疑問である。道徳感情の生得性が仮に認められたとしても、①進化の中でわれわれが備えた感情は相当程度「相手限定」的で必ずしも「人間一般」に向けられるのではないから（例えば「愛情」は「赤の他人」ではなく自分の子どもや親兄弟、配偶者などに向けて生じる）、道徳感情も他部族の人に対してはそれほど強く働かないと考えられる、②道徳感情自体は誰もが備えていても、それに基づいた行動をわれわれは必ずとるわけではない。道徳感情は行動への「動機づけ」「拘束力」の一要素にすぎず、それ以上の強い動機や欲求から「非-道徳的」な行動をとることがわれわれには多々ある（弟に愛情を持ち、弟の喜ぶことをして「あげたい」しそう「すべき」だと思っ  
てはいるが、それ以上に「父の遺した家」をどうしても手にいれたくて弟を言いくるめるなど）ので、本文で挙げたケースなどでは「道徳感情的べし」よりも「獲物を奪う」が優先されやすい。それゆえやはりこの反論は認めがたい。
- (36) ルソー [1972] 41-84 頁。
- (37) マーガレット・ミードによる「平和で自由なサモア社会」の報告とそれへの反論は、その典型であろう。リドレー [2000] 337-349 頁, Gat [2006] pp. 11-17 (邦訳 (上) 29-36 頁) など。
- (38) 佐原 [1999] 58 頁。
- (39) 佐原 [1999] では、狩猟採集民にも殺し合いが見られたが、本格的な戦争は農耕社会の成熟と共に生じたとの見方が示されている（同書 92 頁）。他方、松木 [2001] では、定まった食糧資源供給地を持って定住する社会か、それを持たずに定住しない社会かが戦争の多寡に関係する（戦争が多く見られるのは前者で、多くの農耕社会はそれに該当する）という見方が示されている。同書 17 頁。
- (40) 例えば集落を囲む壁は敵からの防御設備として作られたのか、それとも洪水を防ぐ防水施設、家畜を逃がさないための囲いか。矢尻や槍は武器か狩りの道具かといった問題がここに絡んできて、その判断は専門家に委ねるしかない。具体的な事例は佐原 [1999]。この点で、内野 [2013] に、縄文時代の戦闘に関する興味深い検討がある。他方、人類学において現存する狩猟採集民の調査がなされた場合も、西洋人をはじめとする他民族との接触の影響を当該社会がすでに受け、それ以前とは生活様式や慣行が変わってしまっていることがあり、そこでの調査内容が原始古代の狩猟採集民にどこまで当てはまるかには慎重な判断を要する。Gat [2006] pp.

16-17 (邦訳 (上) 35-36 頁).

- (41) Pinker [2011], Gat [2006]. 他にリドレー [2000] 第8章, Wright [2000] ch. 5, シーブライト [2014] 第3章などにも同様の検討がある。
- (42) Gat [2006] pp.116-117 (邦訳 (上) 170-171 頁), pp.121-122 (邦訳 (上) 178-180 頁), p.124 (邦訳 (上) 181 頁), Pinker [2011] p.43 (邦訳 (上) 101 頁).
- (43) Pinker [2011] p.44 (邦訳 (上) 102 頁だが, 訳文は変えている).
- (44) Pinker [2011] pp.42-47 (邦訳 (上) 100-107 頁), Gat [2006] ch.6 (邦訳 (上) 第6章).
- (45) 古代社会の死者の死因の確定は困難だが, 発掘された骨の状態などからある程度の推定が可能である。槍先や矢尻の食い込んだ骨, 石器で切られたり砕かれたりした痕がある頭蓋骨, 打撃による尺骨の骨折痕などはその推定につながるし, 表面の風化のパターンによって骨の破損が生きていたときのものか死後のものか (周囲の肉が腐る前か後か) 分かるという。周囲からの出土品 (盾や戦闘用斧) や壁画 (戦いの絵) など推定の材料になる。とはいえ, それでも彼らの社会での「戦いによる死者」の数を正確に判断・集計できるわけではないが, その場合の「誤差」が基本的に「少なく見積もられる」形で生じることをピンカーは強調している。「記録がある」社会であれば, 戦死者が相応に正確に数えられるのに対して, 古代の場合, 「戦いによる死者」のうち上記のように骨に証拠が残るのはその一部で, 矢の毒で死んだり傷の腐敗で死んだりした人はカウントされないからである。それゆえ, 以下の統計では, 国家社会に比べて, 古代社会をはじめ文字記録の乏しい社会ほど「戦いによる死者」が実際以上に少なく計算されていると考えられ, そのことは, 以下で示すピンカーの結論を強化する要素になる。Pinker [2011] p.48 (邦訳 (上) 109-110 頁).
- (46) Pinker [2011] pp.48-51 (邦訳 (上) 110-114 頁). 「国家社会」で挙げられているものは, いずれも率が高いとピンカーが推定したもの。17 世紀ヨーロッパは宗教戦争の時期で, 1900 年~1960 年のヨーロッパでは2つの世界大戦があった。2005 年はイラクやアフガニスタンでの武力衝突があって, アメリカ合衆国における戦死者数が最近 10 年で最も多かった。なお, 表 2 中の 4 の「2005 年のアメリカ合衆国」について, 邦訳 (上) 113 頁では「0.0004%」と書かれているが, 死者 244 万 8,017 人中の戦死者 945 人の割合なので 0.04% が正しい。「2005 年の世界全体」についても, 邦訳 (上) 113 頁では 0.0003% と書かれているが, 同様に 0.03% が正しいと思われる。なお, 数字の算出はピンカーではなく, それぞれの社会の調査者が行っている。
- (47) 時代も状況も異なるので単純な比較は決してできないが, 太平洋戦争中のガダルカナル島の戦いで, 同島に上陸した日本軍兵士は合計約 3 万人で, そのうち戦死者は約 5,000 人 (餓死・病死者が約 1 万 5,000 人) と言われる (NHK 取材班編 [1993] 257 頁)。クロウクリークやワオラニ族の数字がいかに高いかがここからもうかがえる。
- (48) Pinker [2011] pp.51-53 (邦訳 (上) 114-117 頁).

#### 参考文献

\* 欧文文献の中で原書を参照したものは欧文標記 (括弧内に邦訳文献記載), 邦訳を参照したものは和文で標記している。

アクセルロッド, ロバート [1998] 『つきあい方の科学』松田裕之訳, ミネルヴァ書房

ブロック, マルク [1995] 『封建社会』堀米庸三監訳, 岩波書店

Brown, Grant A. [2007] “Morality as an Evolutionarily Stable Strategy,” in Malcolm Murray (ed.), *Liberty, Games and Contracts*, Ashgate

エリアス, ノルベルト [1977-78] 『文明化の過程』(上)(下), 法政大学出版局

フランク, ロバート・H [1995] 『オデッセウスの鎖』山岸俊男監訳, サイエンス社

藤本久志 [2001] 『飢餓と戦争の戦国を行く』朝日新聞出版

——— [2005] 『新版 雑兵たちの戦場——中世の傭兵と奴隷狩り』朝日新聞出版

藤原保信 [1974] 『近代政治哲学の形成——ホッブズの政治哲学』早稲田大学出版部

- Gat, Azar [2006] *War in Human Civilization*, Oxford University Press (邦訳：アザー・ガット『文明と戦争』(上)(下) 石津朋之・永末聡・山本文史監訳, 中央公論新社, 2012 年)
- Hobbes, Thomas [1968] *Leviathan*, C. B. Macpherson (ed.) Penguin Books (first published 1651) (邦訳は, トマス・ホッブズ『リヴァイアサン』(一)～(四) 水田洋訳, 岩波書店, 1992 年を参照)
- Hobbes, Thomas [1998] *On the Citizen*, Richard Tuck and Michael Silverthorne (eds.) Cambridge University Press (邦訳は, トマス・ホッブズ『市民論』本田裕志訳, 京都大学学術出版会, 2008 年を参照)
- 五百部裕・小田亮編 [2013] 『心と行動の進化を探る ― 人間行動進化学入門』朝倉書店
- 菊地浩幸 [1997] 「書評／藤木久志著『雄兵たちの戦場 ― 中世の傭兵と奴隷狩り』」歴史評論 572 号
- 松木武彦 [2001] 『人はなぜ戦うのか ― 考古学からみた戦争』講談社
- 内藤 淳 [2007] 『自然主義の人権論 ― 人間の本性に基づく規範』勁草書房
- [2009] 『進化倫理学入門 ― 「利己的」なのが結局, 正しい』光文社
- [2013a] 『『法の目的』論としての正義論と人間科学』法社会学 78 号
- [2013b] 「憲法学は立憲的憲法を正当化できるか？」(1)(2・完) 一橋法学 12 巻 2 号・3 号
- [2015a] 「規範の正当化と人間観 ― ホッブズを進化心理学で修正する：序説」法政哲学 11 号
- [2015b] 「ホッブズの根本的自然法の相対性」法哲学年報 2014
- Narveson, Jan [2007] “Social Contract, Game Theory and Liberty: Responding to My Critics,” in Malcolm Murray (ed.), *Liberty, Games and Contracts*, Ashgate Publishing Company
- [2008] *You and the State*, Rowman & Littlefield Publishers
- NHK 取材班編 [1993] 『ドキュメント太平洋戦争 2 敵を知らず己を知らず』角川書店
- 小田 亮 [2011] 『利他学』新潮社
- Pinker, Steven [2011] *The Better Angels of our Nature*, Viking Press (邦訳：スティーブン・ピンカー『暴力の人類史』(上)(下) 幾島幸子・塩原通緒訳, 青土社, 2015 年)
- ピンカー, スティーブン [2004] 『人間の本性を考える』(上)～(下) 山下篤子訳, 日本放送出版協会
- プレティヒャ, ハインリヒ [1982] 『中世への旅 農民戦争と傭兵』関楠生訳, 白水社
- リドレー, マット [2000] 『徳の起源 ― 他人をおもひやる遺伝子』岸由二監修, 古川奈々子訳, 翔泳社
- ルソー, ジャン・ジャック [1972] 『人間不平等起原論』本田喜代治・平岡昇訳, 岩波書店
- Ruse, Michael [1998] *Taking Darwin Seriously*, Prometheus Books, originally published: Blackwell, 1986
- 佐伯宣親 [1988] 『近代自然法論の研究』成文堂
- 佐原 真 [1999] 「日本・世界の戦争の起源」福井勝義・春成秀爾編『人類にとって戦いとは 1 戦いの進化と国家の生成』東洋書林
- 酒井憲二編著 [1994] 『甲陽軍鑑大成』第 1 巻本文篇上, 汲古書院
- シーブライト, ポール [2014] 『殺人ザルはいかにして経済に目覚めたか?』山形浩生・森本正史訳, みすず書房
- 杉山博・下山治久編 [1990] 『戦国遺文』後北条氏編第 2 巻, 東京堂出版
- 田中 浩 [2012] 「ホッブズの政治思想」『田中浩集 第二巻 トマス・ホッブズⅡ』未來社
- タック, リチャード [1995] 『トマス・ホッブズ』田中浩・重森臣広訳, 未來社
- 内井惣七 [1996] 『進化論と倫理』世界思想社
- 内野那奈 [2013] 「受傷人骨からみた縄文の争い」立命館文学 633 号
- 若松 謙 [1978] 「人間本性の問題 ― ホッブズの利己的人間観をめぐる」(1)(2) 奈良教育大学紀要 27 巻 1 号・28 巻 1 号
- ワトキンス, J・W・N [1988] 『ホッブズ ― その思想体系』田中浩・高野清弘訳, 未來社
- Wright, Robert [2000] *Nonzero*, Vintage Books
- 山内 進 [1993] 『掠奪の法観念史 ― 中・近世ヨーロッパの人・戦争・法』東京大学出版会
- [2005] 「暴力とその規制 ― 西洋文明」山内進・加藤博・新田一郎編『暴力』東京大学出版会
- [2012] 『文明は暴力を超えられるか』筑摩書房

Ought “Every Man” to Endeavour Peace? ( 1 )  
— Modifying Hobbes’s Idea Using Evolutionary Psychology:  
Natural Condition and the Fundamental Law of Nature —

NAITO Atsushi

**Abstract**

We ought to avoid war and seek (or endeavour to keep) peace. This would be the prevailing norm in our time. Then, can it be justified universally for any peoples who have a huge variety of values and beliefs in different countries, cultures and times?

Thomas Hobbes insists “to seek peace” is the fundamental law of nature, which is valid universally. It is because peace is indispensable for every man to attain his own conservation, which is the end of man. He thinks that peace seeking is the effective means for all of us to attain self-conservation.

However, war can be an effective means for men to survive in underproductive environments like Japan and Europe in the Middle Ages. Many people could not secure sufficient life resources by cultivating their fields peacefully at that time because they had only poor knowledge and low technology to produce resources and suffered from disasters and famine frequently. They had to go to wars and plunder other villages in order to gain the necessary resources to survive. Peace seeking would only lead them to starvation and it could not be an effective means for them to attain self-conservation under those conditions. “To seek peace” cannot be a right norm there. It can be justified only on condition that every man can gain sufficient life resources and survive by peaceful activities like exchange, for example commercial deals, in high productivity environments.

The normative validity of peace seeking depends on the environmental conditions and “To seek peace” is not a Law of Nature as a universal norm.